

## トップアスリートによる「社会への還元」について

どんなに才能溢れるアスリートであっても、一夜にしてトップアスリートに生まれ変わるわけではない。トップアスリートへの階段をのぼり詰めるは極めて難しい。凡人にはわからない努力の積み重ね、周りの人びとから物心両面にわたって支えられ、そして、ほんの少しの好運を得た者だけが、栄光を手にすることができるのである。

では、社会から受けた支援に報いるために、トップアスリートは何を還元するのだろうか。

スポーツに限らないが、高度なパフォーマンスは人びとを魅了し元気にする。人種、宗教、政治、性別などを超えて、多くの人びとに感動を与え、社会の一体感をもたらす。それゆえに、トップアスリートは最高のパフォーマンスを発揮することが「社会への還元」だと考え、そして社会もまたそのように思ってきた。しかし、本当にそれだけであろうか。

トップアスリートは一つの道を極めた者であり、厳しい競争社会を勝ち抜いた者である。頂点を目指す者はトレーニングに明け暮れる日々を過ごし、また、志を同じくする者と過ごす時間が多いことから、専門性が強すぎる、ある種排他的な環境にその身を置くことになる。その結果、トップアスリートを目指す者と一般社会との接点は希薄になりがちで、社会もまた、このような排他的環境を当然のことと思ってきた。そのため、トップアスリートは、階段をのぼる過程で、スポーツがもつ公共性への自覚を深める機会を逸することがある。スポーツは「社会の公共財」である、ということに気づかぬままトップアスリートになってしまうのである。

スポーツが「社会の公共財」であるとはどういう意味だろうか。社会のあらゆる人びとがスポーツは素晴らしいと思ってもらえることではない。問われるのは、社会が抱える多様な問題の中で、どのような問題をいかに解決できるのか、ということなのである。

スポーツあるいはトップアスリートが社会へ与える影響力を考えれば、高度なパフォーマンスだけが社会の問題を解決する手段ではないことは明白であろう。例えば、トップアスリートが道を極める過程で得た経験、困難を乗り越え試練に打ち勝った経験を伝えることができれば、これを聴く者は努力することの大切さを実感するであろう。

トップアスリートは、自らの本当の価値に気づく必要がある。社会との接点が増えれば、自らが社会から受けた支援に対し、何をどのように還元すればよいのか、自ずと答えは見えてくるであろう。

スポーツ環境の整備に関する調査研究事業プロジェクト・サブリーダー  
慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科准教授

佐野 毅彦